

昔むかし、あるところに、貧乏なおじいさんとおばあさんが住んでいました。ふたりは、雌馬を一頭と雌犬をいっぴきかっているだけで、ほかには何も持っていませんでした。

ある日、おじいさんは、海辺を歩いていて、魚をいっぴき見つけました。魚はおじいさんにむかって話しかけてきました。

「ねえ、おじいさん。わたしを家に持ってかえってくださいな。そして、わたしの肉はおかみさんにあげてください。スープは馬に、骨は犬にやって、しつぽとひれは、べつべつに庭にうめてください」

おじいさんは家に帰ると、魚を料理して、肉はおばあさんに食べさせ、スープは馬に、骨は犬にやりました。しつぽとひれは、庭にうめておきました。

何か月かたつと、おばあさんと馬と犬は、そろってお腹に子どもができました。それからまた何か月かたつと、おばあさんは、男の子のふたごを生みました。ふたりはともかわいくて、見分けがつかないほどそっくりでした。馬は真つ白な子馬を二頭生み、犬も真つ白な子犬をにひき生みました。魚のしつぽをうめた所からは二本のオリーブの木がはえ、ひれをうめた所からは、剣がふたふり出てきました、

ふたりの男の子は、とてもかしくくて、大きくなると、どこへ行くときも、馬と犬をそれぞれいっぴきずつ連れていきました。二本のオリーブの木は大きく育ち、ふたりは剣をひとふりずつもらいました。

あるとき、兄のぼうが、おじいさんにいました。

「父さん、ぼく、旅に出て、世の中を見てくるよ」

おじいさんは、

「いいとも。行っておいで」といって、おばあさんとふたりで息子を祝福して、家を出してやりました。

兄は、剣を持って、馬に乗ると、弟にいました。

「ぼくに何か悪いことが起こったら、ぼくのオリーブの木がかれるから、ぼくをさがしに来ておくれ」

そして、犬を連れて出発しました。

どんどん進んで行くと、ある王さまの城に着きました。王さまにはお姫さまがふたりありました。兄は、気にいられて、上のお姫さまと結婚しました。

ある朝、兄が、バルコニーから外をながめていると、広い草原のかなたに美しい湖が見えました。

「なんときれいな湖だろう。なんと広い草原だろう。あれはいったいどこなんだろう」と兄がいうと、お姫さまは、

「あそこは、いちど出かけたなら、けっしてもどれないといわれています」と答えました。

兄は、

「ぼくは、出かけて行って、きつともどつて来てみせる」といいました。そして、馬にくらをおき、剣を手に持ち、犬を連れて出かけました。

湖までやって来ると、むこう岸に小さなかわいらしい滝が見えました。滝まで行ってみると、こんがり焼けた肉が串にささっていて、ひとりでぐるぐる回っていました。兄は、一口食べようと馬からおりました。すると、肉がぴよんととびあがって、兄のあごをぽかりと一発なぐりました。兄はおこって、肉を二、三度けりました。それから、また、ひらりと馬にまたがって先へ進みました。

するとうしろから、ひどいどなり声が聞こえました。ふりかえったとたん、兄は、馬と犬と剣もろとも、石になってしまいました。

あくる朝、家では、弟が目を覚まして、兄のオリーブの木がかれているのを見ました。

弟は、

「兄さんがだめになってしまった」といって、おじいさんに、

「父さん、ぼく、兄さんをさがしに行くよ。何か悪いことが起こったみたいなんだ」といいました。

おじいさんとおばあさんは、息子を祝福して、家を出してやりました。

弟が剣を持って馬に乗り、犬を連れてどんどん行くと、あの王さまの城に着きました。

兄弟は、うりふたつだったので、だれもが兄が帰って来たのだと思いました。お姫さまは、

「まあ、あなた。もうもどつていらっしやらないのかと思っていました」といいました。

弟は、

（やつぱり兄さんはだめになってしまったんだな）と思いました。

夜になって、お姫さまと寝床に入るとき、弟は、お姫さまとのあいだに剣をおきまし

た。お姫さまは、

「まあ、どうしてまんやかに剣をおくんですか」とききました。弟は、

「一年間、ここに剣をおこうとちかいを立てたんだ」といいました。

あくる朝、弟がバルコニーからながめると、広い草原のかなたに美しい湖が見えました。

「なんときれいな湖だろう。なんと広い草原だろう。あれはいったいどこなんだろう」と、弟がいうと、お姫さまは、

「あそこは、いちど出かけたなら、けつしてもどれないそうだって、前にあなたにいわなかったかしら」といいました。そこで弟は、

（じゃあ、兄さんはあそこへ行つたんだ）と分かりました。

弟は、馬にくらをおき、剣を手に持ち、犬を連れて出かけました。

ずんずん進んでいくと、小さな滝にやって来ました。こんがり焼けた肉が串にささっていて、ひとりでぐるぐる回っていました。弟は、一口食べようと馬からおりました。

すると、肉がぴよんととびあがって、弟の頭をぽかりとなぐり、あごにも一発くらわされました。弟はだまつて馬にまたがると、そのまま先へ進んで行きました。

すると、うしろから、大声でののしつたり、ばかにしたりする声が聞こえました。けれども弟は、ふりかえらないで、かまわずどんどん進んで行きました。

しばらく行くと、たいへん年とったおばあさんが、足を引きずりながら近づいて来ていました。

「もどるんだよ。おまえの兄さんは、あそこで石になったんだ」

滝の所にもどると、おばあさんは、弟に、水の入ったびんとばらの花をわたして、

「おまえの兄さんは、その一番はしの石だ。でも、ここの石ころぜんぶの魔法をといてやりたいなら、先にやっておあげ」といいました。

弟は、あたりちめんの石ころにびんの水を次つぎとふりかけ、ばらの花をかざしました。すると、王さまやらお姫さまやらが、次つぎに生きかえって立ちあがりました。軍隊がぞろぞろと立ちあがり、ブカブカドンドン音楽を始めました。たくさんの人びとがみな立ちあがりました。

最後に弟は、兄に水をかけてばらの花をかざしました。たちまち兄は生きかえりました。弟は、

「ねえ、兄さん。兄さんのオリーブの木がかれたのでさがしに来たんですよ。そして、この水とばらの花で、生きかえらせたんです」と、これまでのことを話しました。そして、ふたりで城に向かって楽しく馬を進めながらいきました。

「兄さんはお姫さまと結婚したんですね。ゆうべ、ぼくは、お姫さまの側で寝ましたよ」それを聞くと、兄はおこって剣をぬき、弟の首をひと打ちではねてしまいました。すると、馬も犬も死んでしまいました。兄は、びんとばらの花を弟から取りあげて、城へ帰って行きました。

その晩、兄が寢床に入ると、お姫さまがいました。

「まあ、どうなさったんでしょう。ゆうべは、一年間剣をまんなかにおくとちかいを立てたとおっしゃったのに」

兄は、

「ああ、弟をころすとは、なんてまちがったことをしてしまったんだろう」といいました。

あくる朝、兄は早く起きて弟をさがしに出かけました。そして、弟の体を見つけると、びんの水をふりかけ、ばらの花をかざしました。たちまち、弟は生きかえって、

「ああ、なんてぐっすり眠ったんだろう」といいました。馬も犬も起きあがりました。

兄弟が城に帰ると、みな大よろこびでむかえましたが、お姫さまでさえ、ふたりを見分けることができませんでした。やがて、弟は下のお姫さまと結婚し、みんなそろって、幸せに暮らしました。

これで、魚がくれた子どもの話は、おしまい。

原話…『世界の民話⑩アメリカ大陸』中村志朗・青山隆夫訳／ぎょうせい

再話…村上郁